

アウト・オブ・タイム

2005(平成17)年2月27日鑑賞(ホクテンザ1)



監督=デヴィッド・カーソン/出演=ウェズリー・スナイプス/ジャクリン・オブラドール/スチュアート・ウィルソン/キム・コーツ/ニコラス・アーロン (ギャガ・コミュニケーション配給/2004年アメリカ映画/96分)

第4章

SHOW・HEYお得意の社会派映画

……「人違い」という単純ミスによって、ボスニア紛争生き残りの主人公の身体には、自白剤「XE」が打ち込まれた。そこに絡むのはFBI。自白剤が作用する中、主人公の記憶の中にあるボスニアの戦場での地獄絵が入り交じり、話は二転三転……。 「XE」による神経破壊のアウト・オブ・タイム(時間切れ)まで8時間! 果たして解毒剤は間に合うのだろうか……?



どこかで見た同じタイトル

「アウト・オブ・タイム」とは「時間切れ!」という意味。デンゼル・ワシントン主演の映画に原題『OUT OF TIME』、邦題『タイムリミット』という映画(03年)があった(『シネマルーム4』101頁参照)。

この映画は、①警察署長マットの不倫相手の人妻が火災で死亡した、②死亡直前、生命保険の受取人がマットに変更されていた、③真犯人を挙げなければ、不倫を目撃されたマットが犯人とされてしまう、④さあ、タイムリミットはすぐそこだ……というスリリングで面白い映画だった。さて、この映画の「OUT OF TIME」とは……?



ボスニア紛争とは? 記憶に残る地獄絵とは?

ボスニア紛争を扱った映画は少なく、『エネミー・ライン』(01年)くらい。イラクを中心とした中東問題も難しいが、バルカン地域での民族紛争はもっと難しく、ユーゴスラビアくらいはわかっても、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチ

ア、コソボなどになるとほとんどわからないはず（『シネマルーム1』71頁参照）。

この映画の主人公ディーン・ケイジ（ウェズリー・スナイプス）は、今は退役しメリーランド州ボルチモアに住んでいるが、陸軍特殊部隊の隊員としてボスニア紛争に参加し、部隊が全滅した中、ただ1人だけの生き残り。

ディーンを今なお苦しめているのは、その地獄の戦場で親友のスコットを失ったこと。そしてそのスコットの死亡については、スコットの妹で今はディーンの恋人となっているエイミー（ジャクリン・オブラドース）にも言えないような苦悩が……？ ディーンの記憶の中には、その時の地獄絵がありありと残っていた……。

自白剤 XE とは？

この映画のポイントは、強力な自白剤である「XE」。人間の意識の奥深くに存在している記憶を本人の意思とは無関係に薬物の効果によって引き出すのが自白剤。私はその方面の知識をもちあわせていないが、特殊な分野では、現実はこの種の薬物が使用されているらしい……？

こんな薬物は当然人間の神経に悪影響を及ぼすもの。「XE」は人間の記憶を覚醒させるかわりに、注射後8時間ですべての神経系統を破壊してしまい死に至らしめるという恐ろしいもの。

したがって、こんな新薬の開発には、「解毒剤」もセットで開発しておかなければ大ゴトに……？

事件の発端は単純な人違い！

この映画のテーマは、「XE」の注射によって、主人公ディーンの記憶の奥深くに残っているボスニアでの地獄絵がよみがえり、自白を強要されるディーンの頭の中が混乱して……というもの。そして、なぜこのディーンに「XE」が注射されることになったのかというと、それは単純な「人違い」！ すなわち、恋人のエイミーと約束をした午後7時に「ダイナー」（列車の食堂車を改装した簡易食堂）を訪れたディーンを、「XE」の密売を企んでいたサリバン（スチュアート・ウィルソン）とその手下ピーターソン（キム・コーツ）らが、密売の相手と勘違

いってしまったというわけだ。

しかし、この「人違い」という設定は、ストーリーづくりのためのテクニックとはいえ、ちょっとお粗末では……？

「7時にいつものダイナーで」の約束は？

約束の時間に遅れたエイミーに対して、7時きっかりにダイナーに着き、ディーンがエイミーを待っていたのがすべての誤解のはじまりだった。7時にエイミーがダイナーへ着き2人仲良く食事をしていれば、つまらない(?)「人違い」も生じなかったのだから……。

1人テーブルに座り、目つき鋭く周囲を見渡しているディーンの姿を見て、サリバンたちがこれがターゲットと誤解したのもやむをえないかも……？ だって、相対的に判断すれば、7時にこのダイナーに1人でやってきた、それらしき男は他にいないのだから……。

エイミーがダイナーに着いたときは、既に銃撃戦が終わっていた。すなわち「XE」を注射されたディーンは、何が起こったのかもわからないまま動物的に反撃し、その場を逃走した後だった。そして叩きのめされた状態で後に残ったのは、サリバンの仲間の1人であり、「XE」注射の実行犯であるマクナブ(ニコラス・アロン)。

いつも出てくる FBI !

現場に落ちていた最新の皮下注射器を発見したエイミーはコトの重大さに気づき、マクナブを尋問したが、そこに登場したのが、アメリカ映画の「犯罪モノ」にいつも出てくる FBI。FBI 捜査官と名乗るのは黒人と美女の2人のコンビだが、この2人はえらく高飛車。市警の刑事にすぎないエイミーに対し、命令口調でマクナブの身柄引渡しを要求した。

さて、FBI がこの事件に何の関わりをもっているのか？ エイミーには想像すらできなかったが、ディーンの身に危険が迫っていることは明らか。そして今の状況下ではディーンには誰も味方がいないこともたしか。そこからエイミーの獅子奮迅の働きが……。

それにしてもディーンはタフ……？

ダイナーから逃走したものの、幻覚症状によってフラフラ状態のディーンは、結局、サリバンらに捕らえられ、その尋問にさらされることに。サリバンらを知りたいのは、「XE」を取引するために必要な、FBI 内部の情報。それをディーンが知っているという誤解のうえに、自白剤を注射されたディーンに対して行う尋問はうまくかみ合わず、スムーズにいかないのは当然。したがって、この尋問がこの映画のハイライト場面なのだが、ちょっと違和感あり！

他方、「実力」でここを逃走したディーンが、幻覚でフラフラしながらも次々と発揮する超人的なパワーとアクションがすごい。

「XE」を打たれたことによって、あのボスニアでの地獄絵が現実の世界の中に入り乱れて登場してくるという幻覚状態となっても、エイミーと出会った時だけは正気に戻ったり、いざという時は銃の腕前もたしかというのはちょっとおかしい……？ これでは、8時間後に死亡に至るという「XE」の効果が全然イメージできない……？

ちょっとディーンはタフすぎるのでは……？

私の注目は美人刑事と美人 FBI 捜査官

FBI 捜査官はこの映画ではチョイ役扱い。特に女性捜査官は、ピストルで撃たれて重傷を負うだけという損な(?)役柄。しかしそんなチョイ役ながら、この捜査官は結構美人で魅力的！

もう1人、スコットの妹で、ディーン恋人となっているエイミーは、ボルチモア市警の女刑事。彼女は『6デイズ／7ナイツ』(98年)などに出演している女優だが、この映画では結構決まった、いい演技を見せている。映画自体は大したことないが(?)、そんな場合の私の注目は、例によってこの2人の美女……！

2005(平成17)年2月28日記